

第一回 国語科問題文

二〇一八

〔一〕 つぎの文章を読んで、別紙の問題に答えなさい。

A 1

六月の中旬、じとじと、雨ふりの日がつづく。さすがにひんやりする。ブラウス一枚では、長袖ながそでだって寒い。それでもみんな、意地でも半袖で学校に行く。右へならえて、わたしも半袖。だから、ベストは手放せない。

うちの中学校は、公立なのに、制服がまるで私立みたいにかわいいって評判だ。いまは、夏服。それに合わせるベストは市販品はんはんで、決められた色さえ着ていたら、なんでもいいことになっている。

夏服のベストの色は、白、水色、グレー。わたしは小さいころから、水色が好きだったから、水色のベストを着たかった。このへんできがしても売ってないので、電車で三十分行ったところにある、地元では大きなデパートまで、わざわざ、お母さんといっしょに買いにいった。わたしのこだわりのベスト。この一着をゲットして、わたしは……だった。こんなにおしゃれなベストを着ている子はいない。そう思った。そうしたら、衣替えをした日。クラスの女子の半分くらいが、まったく同じベストだった。わたしだけ……、みたいに思ってうかれていた自分が、とてもはずかしかった。

今日は、一、二時間目が美術の授業。絵の具をパレットにだしていると、玲央れおからメモがまわってきた。

『今日、四人でたんプレ、買いにいこうよ』誕生日プレゼント——。だれの？ 1 それでも、

『いいよ』と、書いてまわす。

『ごめんなさい、わたし、今日はやっぱりムリ』と、愛海から。

『桃ちゃんももちゃんはさそわないの？』と、わたしも書いてまわす。すると、あっさりした答えが返ってきた。

『さそわないよ。桃花ももかのプレゼント買うんだから』

桃花の誕生日をみんなが知ってる。知ってるってことは、本人が教えたって、ことだよな。

『桃ちゃんの誕生日って、いつなの？』同じテーブルにむかって色をぬっている里美に直接ささやいた。 2

『来週の月曜日だって』と、里美もひそひそと教えてくれた。

とたんに、くらっとした。そんなの、今日じゃなくてもいいのに。今日はわたしの誕生日なんだよ。

① いったん家に帰ってから、おこづかいのはいったお財布さいふを持って、すぐ駅前に集合。だいたい、ひとり千円前後って決めて、駅のそばのざっかやに入った。

自分が誕生日にほしいと思っていたものを買った。桃花のために。それは、真っ白なふわふわした、ハムスター。キーチェーンがついて、表から見ると、ハムスターの顔なんだけど、裏を見ると、ICカード入れになっているやつ。どうしても、それが目にはいつてしまって、ほかにいいと思えなくなったから。

3

それは、イヤホンだった。きれいな黄緑色で、イヤホンを耳にいれると、耳に花をさしているように見えるの。中学に入学したお祝いで買ってもらったスマホで、音楽をききたいから、それがずっとほしいと思っていた。

自分がゲットしたら、桃花とおそろいだったなんて、絶対にいや。だから、お願い。玲央も里美も、それを桃花にあげたりしないで。

『桃花ってさあ、なんでもはつきりしてるから、こういうビタミンカラーとか、よくない？』

『案外、ラブリーだったりして』

『それ言ったら、オタクだったり』そんな玲央と里美の笑いあう声が耳にはいる。

4

なんだ、ふたりだって、桃花のこと、よく知らないんだ。好みとか、ふだんからこんなものをほしいな、って思っ

ているとか。

《 b 》のは、べつにわたしにかぎったことじゃないよね。言ってみる？ わたし、こういうものが好きなんだって。ふたりに。

ううん。やっぱりダメ。それじゃあ、ちょうだいって言っているようにきこえるかもしれない。そうきこえなかったとしても、

「美雨の誕生日って、そういえば、いつなの？」って、きかれたくない。ひとのたんプレ買いにきて、ついでみたいに買ってもらいたくない。お店をでるときに、花のイヤホンがまだあることを確認して、ほっとした。

重い気持ちをひきずって、家まで帰ると、お父さんが帰っていた。

「ただいま……」あいかわらず、かつおだしの匂いがする。そして、あいかわらず、お父さんは、わたしにぶあつい背中せなかの壁を見せて、「お帰り」とつぶやいている。

このひとはきつと、わたしの誕生日なんて知らない。かつおだしで、いったい、なにをつくっているんだろう？ 今日みたいな日は、わたしの好きなものだったら、それだけでもいいな、とちよつと気になって、台所をのぞきに行った。

「美雨、ちよつとおそくなつたから、おまえも手伝うか？」

「え？ いい」お父さんは手を止めて、わたしを見た。

「なに？」「いや……」毎日、毎日、同じやりとり。うんざり。そのあとの言葉がない。お父さんはいつも必要最小限のことしか、しゃべらない。どこでなにに考えてるのか、《 b 》のに。

そして、唐突に、言った。

「美雨は……なんだかいいつも、機嫌げんがわるいなあ……」いきなり、金縛りしなづりにあったような衝撃しょうげきをうけて、しばらく動けなかった。

いつもって、いつのいつもなの？ お母さんがいなくなつてから？ だとしたら、ひどすぎる。だって、機嫌よくすごしているほうがどうかしてる。大体どうしてそんなことを、このひとに言われないといけないの？

「ほら、おまえも手伝いなさい。これ、使つて」赤いリボンのかかった、白い、さつぶうけいな包みが、ふたつ。

「今日、誕生日だろ？」その言葉はまるで、（ 1 ）もののように、わたしの中でこだました。考えないようにしていた言葉。どうい

うふうな位置にあつて、どういふふうにしよ③りするのか。いちばんこまる言葉。それが、いちばん思いもかけなかったひとの口から、でてきた。だから……これって、この流れだと、誕生日プレゼント、なの？ でも、これ使つて手伝つて、どういうこと？

いまの衝撃から立ちなおれないまま、真っ白な包みをやぶく。手がふるえる。ひろげてみると、長いひもがついた、カフェエプロンのようなものだった。

自分で、つけてみるまえに、「ほれ、こうやってつける」と、お父さんがみずからやってみせてくれた。カフェエプロンというより……。

「これ、板前さんの前かけ？」やつと声がでた。すると、お父さんは、てれたような顔をした。

なんででれるの？ これが前かけだと、この細長くてうすい包みは、あけるまえから、なんとなく予想がついた。ブツをとりだして、お父さんをにらみつけた。

そうしたら、（ 2 ）そんな顔のお父さんがそこにいて、わたしの手から包丁はちりをするりとぬきとった。

「いいだろう？ この包丁！ お父さんが愛用している包丁と同じ職人さんの手でつくったもので、おとな用より、すこし小ぶりなんだ。ほらここに」

包丁の柄えの部分に漢字で『美雨』とはいっている。

「誕生日プレゼントだと言つたら、彫はつてくれた」そう言つて、包丁を返してくれる。わたしは、力がぬけそうになって、あやうく包丁を落とすところだった。

ハムスターとイヤホン。お母さんがいたら、それをもらっている予定だった。もふもふのハムスターにすりすりしながら、音楽をきいて

ごきげんな誕生日をむかえているはずだった。

「美雨も手伝え。今日はおまえの好きなオムライスをつくるから」

今日は、いったいなんていう日なんだろう。わたしは手にしていた前かけをお父さんにつかえした。

「美雨？」

「お父さんは知らなかったの？ わたしがオムライス、食べられないってこと」

自分でも思っていないほど、（ 3 ）声だった。

「誕生日にオムライスがいちばんダメだって、知らないの？」

お父さんのびっくりした顔。やめてよ、その顔。どうしていつも。

「オムライスを食べると、はきそうになるんだけど」わたしは静かに、包丁を作業台の上に置いた。

「なに言ってるんだ。おまえ、オムライス、好きだっただろう！」その言葉はよけい、わたしを（ 4 ）させた。

「もう今日はつかれちゃったから、寝るね」わたしは、冷えてしまった指先を胸のまえでこすりあわせた。

「美雨！」

お父さんの声を階下にききながら、長かった一日を早く終わらせたくて、制服のまま、ベッドにもぐりこんだ。

玄関をでると、また、雨。わたしが泣くと、雨がふる。学校でも、泣きすぎた目がなんだかはれぼったくて、ゴロゴロして、お昼まで、ずっとほーっとしていた。

はれた目をみんなに見られたら、「美雨ちゃん。なにかあったの？ だいじょうぶ？」って、言われそうで、なるべく下をむいていた。でも、そんな心配はする必要のないことだった。

お弁当の席をつくっていると、「わたしもいれて！」と、高いテンションで、わたしたちのグループに最近やつてくるのは、千佳。校内合唱コンクール^④のしきしやをかってでている。まちがいなく、このクラスのリーダーのひとり。

ランチクロスをほどこいて、またまたいやな予感がする。今日もお弁当箱がちがう。しかも、水筒かと思ったこれは、スープポットだったのか。お弁当のふたをおそろおそろ、あげた瞬間、「わあ、美雨ちゃんったら、オムライス！」と、桃花の第一声が教室にひびく。

桃花の声の大きさより、まさかのオムライスがいってるってことに、

ア

信じられないものを見てしまった。小さ

く折りたたんだ、メモ。開くと、『今度こそ、お誕生日おめでとう。お父さんより』と走り書き。力のかぎり、ぐしゃぐしゃにまるめて、カバンにはうりこんだ。

「食べて、いいよ……」やつのことで、そうつぶやくと、桃花が、「では、いただきます」と、無造作に、卵にハシをいれた。

「ん。ん？ あれ？」口の動きが止まった。「美雨ちゃん、これさあ、オムライスじゃないよ」

え？ 言われて、オムライスをよく見た。桃花がけずった部分から、中のライスが見えている。たしかに、ケチャップライスの色じゃない。わたしは、スプーンでひとくちすくいあげた。この色合い、わたしは知っている気がする。

『今度こそ、お誕生日おめでとう』お父さんの言葉と、オムライスの味が口の中で、まざりあった。梅干しのすっぱさに、バターとしらすほし。ベーコンとにんくの隠し味。その一見バラバラのものをまとめているのが、あまじょっぱい、しょうゆ味のうす焼き卵だ。

これ、知ってる。食べたことがある。わたしの……大好きな味だ！ とたんに、

イ

小さいころ、わたしはオムライスが大好きで、すこし熱があるのに、オムライスが食べたいって、わがままを言った。たしか誕生日だった。お父さんは仕事がいそがしくて、ちっとも帰ってこなくて、お母さんとファミレスに行ったんだ。で、オムライスのつた、お子様プレートを目のまえにして、いさんで食べたら、せきこんで、はいてしまった。お母さんがもう、ほんとうに小さくなって、お店のひとや、まわりのひとにあやまっていた、なにも食べないで、でてきてしまったのをよく覚えている。それ以来、オムライスを見ると、気持ちが悪くなつて、食べられなくなっていた。

小学校一年の誕生日に、どうしてもオムライスが食べたくって、泣いていたら、このオムライスがでてきた。見かけはオムライスなのに、全然オムライスじゃないもの。お父さんがつくってくれた、ハッピーバースデーのオムライス。

「み、美雨、もつとゆっくり食べたら？」玲央が、あきれた顔で見ている。

スープポットをあげると、かつおだしと長ねぎの匂いがひろがる。こくつとひとくち飲むと、

ウ

それは、長ねぎの

和風クリームポタージュ。これもまた、しらすほしと梅干しのオムライスにぴったり合う。思い出がひととおり、頭の中をぐるぐるしおわつ

て、ほおつとひと息。

「よかった」愛海がつぶやいた。わたしの視線に、

「あ、うん。今日、美雨ちゃん、朝から調子わるそうだったから、だいじょうぶかなって、思ってたけど、元気でたみたいで、よかった」
愛海の言葉はやわらかくて、すこしあったかくて、おふろの湯気の中からきこえてくるみたいだった。
そうしたら、自分の中のなにかがほじけて、思ってもいなかった言葉が、息とともにあふれた。

「あのね、きのう、わたしの誕生日だったの——」

みんなのハシが止まった。瞬間、手で口をおさえても、もうおそい。

「あ、あの！ ちがうの、あの、わたし」でちゃった言葉はとりかえせない。

「美雨ちゃん、お誕生日！ おめでとう！ あのね、わたしも！ 来週の月曜日！」

桃花がやたらうれしそうに、手をにぎってくる。みんなは、どうしようって顔をしている。桃花のたんプレ、ナイショで用意してるのに。
なんできのう言わなかったの、ってふつう、思う。

「美雨ちゃん、ごめんね、ごめんね」愛海のほうが、わたしより傷ついた顔をしていたかもしれない。きのうのことも、いまのことも、全然愛海のせいじゃないのに。

「だったらさあ、美雨ちゃんのたんプレ、買いにいこうよ！ ついでに、わたしのもさ」と、桃花。

「どうしよう……。せっかく桃花にナイショにして買ってきたのが、ばれちゃう。なにか言わなきゃ、なにか。」

「いいの、いいの。もうすぎちゃったし、あの、気にしないで。ほんとにお願い」

玲央と里美のこまった顔に見つめられて、消えてしまいたくなった。ただ、口からでちゃっただけなの。オムライスがおいしくて、思い出がおいしくて、愛海がやさしくて、ぼろつとでちゃったの。

オムライスの味が口の中のこっている気がした。家までの帰り道が遠い。そつとドアをあけると、家の中が暗かった。今朝は、早くでていったから、もう帰ってきてると思ったのに。それで、なんとなく、ほつとした。お父さんに、「オムライスおいしかったよ」のひとつとがかんたんに言えたら。すこしは楽になるかもしれないのに。

家中の電気をつけて、テレビのスイッチを入ると、テーブルの上にメモがあるのに気づいた。『冷蔵庫にいれてあるから、おやつに食べなさい』と書いてある。それは大きなどら焼きだった。ラップをはずすと、いい香りがひろがる。まさか……手作り？ ホイップクリームがそえられていて、まるでパンケーキみたい。それに、なんだか、こんもりしていて、重たい。ひとくち食べてみた。

「うわあ。なんて」口の中で、果物のみずみずしさがはじけて、びっくりした。ちよつとめくってみる。あんこをうすくぬった土台に、大きく切った果物がしきつめてある。いちご、ブルーベリー、オレンジ……ゼリーでかためて宝石のようにキラキラして見える。

これ、きつと、誕生日ケーキのつもりだったんだ。こんなにおいしい手づくりおやつなんて、生まれてはじめてかもしれない。わたしが、おいしいって、よろこぶ顔を想像しながら、つくってたんだ。それなのに、わたしは……。

「おいしかったよ、お父さん。ありがとう」だれもない台所にそうつぶやいた。

三人家族。たった、三人だけの家族。それなのに、その思いがどうして、おたがいに伝わらないのだろう。だれがわるくて、なにがわるくて、こうなったのか、わたしにはわからない。同じ家の中にいれば、当然、なにも言わなくても、わたしのことをお父さんは知っているし、お父さんもお母さんも仲がよいのだと、勝手に思っていた。

ひとりぶんにしては大きすぎるこのどら焼きは、きのう、ふつうに食卓についていたら、ろうそくが灯って、でてきたのかもしれない。それを見て、わたしはどんな顔をするだろうって、ふたりで半分こして食べようって、きつとお父さんは、楽しみにしてた。自分とおそろいの包丁に名前まで入れたときのお父さんの気持ちは、どんなだったのだろう。

わたしはわるい。相手を思いやってあげられるだけの^a 力と、思いを口にして伝えるための^b がたりない。

「おはよう、お父さん」わたしが起きると、いつもお父さんは起きている。ほんの一月まえまで、それは、お父さんじゃなくて、お母さんの仕事だったのに、お母さんがお母さんの仕事を放棄した。いまはお父さんが、お母さんの仕事もしている。

毎日の朝ごはんは、ほんとうにおいしい。そして、そのおいしさにかくれているのは、お父さんの強がりだ。だから、わたしはそれをきちんと食べたくて、すこしだけ早起きするようになった。

「あのなあ、美雨」

「ん？」

「きらいなものとか、食べられないものとか、あるか？」

「え？」

「いや、ほら。まえ、オムライス……」

「ああ。誕生日のあれね」

「お父さん、つくったものを食べてもらえないのって、大ショックだったからさ」

「命かけて料理してるって、言ってたもんね」ホントごめんね、あのときは。

「命かけて料理してる」という言葉にみるみる真っ赤になったお父さんは、ぶいっと横をむいた。

「バ……とつとと、食べる。遅刻するぞ」

「はーい」

でれて横をむいたお父さんは、ぶあつい壁をつくらなかった。用意してあったお弁当を、カバンにしまう。靴をはきながら、わたしは言った。

「お父さん。わたしのきらいなものは、ケチャップのオムライスと、スライストマト、カニカマ、ドライフルーツのはいったパウンドケー

キと、生の貝、かな」

すると、お父さんは、玄関にでてきてこう返してきた。

「そうか、ありがとう」ありがとう!? わたしはおどろいて、お父さんの顔を見た。お父さんがわたしにお礼をしっかりと言うなんて、いままでになかった。

なんだか、すごいなって、思った。おとなのくせに、わたしより、ずっとすごい。

「行ってきますー!」

A²
ドアをあけただけで、ガンガンはいつてくる太陽が、もうすっかり夏の色をしていた。

つぎの文章を読んで、別紙の問題に答えなさい。

私がある日国立博物館に行ったのですが、偶然、こんな光景を目撃しました。先生に引率された大勢の小学生たちが、熱心に陳列品を見守っておりました。そして、それぞれ手にした小さなノートに、一生懸命なにやら書き込んでいるのです。

はじめのうちは、それをとてほほえましい光景だと思って私は眺めていたのですが、ふとそのうちにある奇妙なことに気がつきました。生徒たちが熱心に見つめていたのは、陳列品そのものではなく、その側に立てられている解説らしいのです。そして、小さな手にぎりしめた鉛筆で一生懸命ノートしているのは、その解説のメモであり、先生の説明らしいということに気づいたのです。

おそらくこの少年たちは、あらかじめ先生の与えた注意を忠実に守ったままでなのでしょうが、私たちが芸術に接する場合、その解説や説明がたとえ如何に重要であろうとも、それらのものが、直接対象から受ける印象や感動に勝つていいはずはありません。だからこそ、少年たちもわざわざ実物を見るために足を運んだのです。

偶然私がぶつかったこの小さな出来事のなかには、芸術を観賞する上での、二つの大きな内容をふくんでいるように思えます。一つは、知識や解説なしには、芸術の観賞はなし得ないと考える考え方であり、他の一つはたとえ自分がある芸術作品から、直接強い印象なり感動なりを受けたとしてもそれを正当な価値判断の尺度としないで、より権威があると思われる他人の意見、いわば定評にたよろうとする態度であります。

この博物館で見かけたような、まだ年若い少年たちにあつては、自分の判断力のみにたよるわけにゆかぬのは当然でしょうが、しかしこういう態度が（１）に続けられてゆくうちに、いつしか思考上の習性となってしまうものなのです。それは今や、恐るべきことながら、今日の社会にあつては一つの（２）にさえなっているように私には思えるのです。

人間は知性の動物といわれながら、しばしばその人間たるゆえんであるところの知性そのものが、純粹な観賞をさまたげている例を、私はいくつも想い浮べることが出来ます。しかし、これはなにも芸術に限ったわけではないでしょう。一般のモラルにあつても、誤った知性が、人間を動物以下にすることさえ、私たちは日常目撃するところなのです。

しかしこのことは、高度の意見を杖に、自分の審美眼を向上させようとする真面目な態度を否定するものではありませんし、正しい思考と、長い訓練によって、はじめて感じることの出来るような種類の美しさが、芸術の世界に存在することとたしかです。しかし、何よりもまず裸になつて、すべてを自分の尺度から始めなくては、決してそのような高い美しさを感じ得るようになれないということを、申し立てるに過ぎません。

博物館の少年たちのような態度は、一見正統な努力の如く見え、また、あるいは立派な教養として今の一般社会では通用するかもしれませんが、それはもはや、芸術の美しさとは、全く無縁なものというべきでしょう。ゲートは「真の教養とは、再び取り戻された純真さに他ならない」といいました。まさに至言（最適な語）というべきではないでしょうか。

また、権威に弱い日本人の特性や、とかく絶対的なものにたよろうとする態度は、恐らく、私たちの祖先の代から長い年月にわたって体験してきた政治形態と無縁ではないように思えますが、芸術のなかから、本当の美しさを発見するためには、そのようなうっかりすると落ち入りがちな陥穴からどうしても逃れなければなりません。そのためには、この有名な笑話が、どんな説明にも勝る教訓を与えてくれるかもしれません。

昔、江戸に、ある食通がおりました。ことに更科蕎麦にかけては当代随一といわれ、その権威は自他ともに許すほどでしたし、江戸中の蕎麦屋という蕎麦屋は、みな彼の批評を怖れておりました。彼は常にこういうのが口ぐせでした。蕎麦というものは、けつして汁をたくさんつけてはならぬ。それが上品な食べ方であるし、本格的な食べ方だと。そしてもし、汁をジャブジャブつけて食べている人を見かけよう

ものなら、下品にして邪道じやであるときめつけ、注意さえ与えたのです。また注意された者も、それを有難ありがたがったといわれるほど、とにかく彼は自他ともに許す権威だったのです。しかしやがて、この大権威にも臨終が訪れました。枕辺まくらに侍る弟子たちはべがこういいました。先生、どうか最後の御言葉おを。哀れな通人あわ（物事をよく知っている人）は、苦しげにひとこと、かすかな声でこうつぶやいたかと思うと、静かに息をひきとつたということです。

「一度でいいから、更科蕎麦に、dみたかった。」

（芥川也寸志の文章より）

第一回 国語科問題

〔一〕~~~~線 a がありますが、「右へならえ」とは「わたし」のどのような気持ちを表していますか。自分のことばで書きなさい。

(二) ☐ア、☐イに入る最もふさわしい二字の熟語を考えて書きなさい。

(三) ☐1～4には、つぎのア～エのどの文が入りますか。記号で書きなさい。

ア でも、いちばんほしいものは、とっておいた。

イ それをきいて、なんだかほっとした。

ウ 声がうまく出ない気がする。

エ 行くような気分じゃない。

(四) ———線①～④を漢字に直しなさい。

(五) 《 b 》には同じことばが入ります。ふさわしい十字程度のことばを考えて書きなさい。

(六) ……線 c とありますが、この時の「わたし」の気持ちを自分のことばで書きなさい。

(七) () 1～4に最もふさわしいことばをそれぞれ選び、あとに続くように必要なら直して書きなさい。

悲しい うれしい むずかしい やさしい 冷たい 軽々しい すがすがしい はずかしい

(八) ☐ア～ウには、つぎの1～3のどの文が入りますか。番号で書きなさい。

1 あたたかさが胸におちる。

2 気持ちわるさがこみあげてきた。

3 なつかしい思いがあふれてくる。

(九) ……線 d とありますが、「なにかがほだけ」たのはなぜですか。自分のことばで書きなさい。

(十) ☐a、☐bに入る最もふさわしい二字の熟語を考えて書きなさい。

(十一) 文章のはじめの——線 A₁と、おわりの——線 A₂を比べると、「わたし」のどのような気持ちの変化が表れていますか。美雨の心の成長を、文章全体から考えて自分のことばで書きなさい。

〔二〕(一) ———線 a「奇妙なこと」とありますが、「小学生たち」のどのような姿勢が「奇妙」のですか。最もふさわしいことばを、文中から十二字で探して書きなさい。

(二) () 1・2に入る最もふさわしいことばをつぎの語群から選び、記号で書きなさい。

1 ア 無作法 イ 無慈悲 ウ 無機質 エ 無自覚

2 ア 規則 イ 風潮 ウ 定説 エ 原因

(三) ~~~~~線 b の「例」について、どのようなものがあるか、自分で具体例をひとつ考えて書きなさい。

(四) |||||線 c とありますが、それにはどうすべきであると「私」は述べていますか。文章全体からわかる「私」の考えを六十字以内で書きなさい。句読点もふくみます。

(五) ☐d に入る最もふさわしいことばを、文中から探して書きなさい。

○時間は五十分です。
○答えはすべて答案用紙に書きなさい。

[—]	(—)
-----	-----

(二)

⑦	
⑧	

(三)

1	
2	
3	
4	

(四)	
①	ざ つ か や
②	さ っ ぷ う け い
③	し よ り
④	し き し や

(五)

(六)

(七)

1
ものの

2
そうな

3
声

4
させた。

(八)

ア
イ
ウ

(九)

(+)

a
b

(十)

--	--	--	--

(一)	
(二)	
(三)	
(四)	
(五)	
(六)	
(七)	
(八)	
(九)	
(十)	
(十一)	
(十二)	
(十三)	
(十四)	
(十五)	
(十六)	
(十七)	
(十八)	
(十九)	
(二十)	
(二十一)	
(二十二)	
(二十三)	
(二十四)	
(二十五)	
(二十六)	
(二十七)	
(二十八)	
(二十九)	
(三十)	
(三十一)	
(三十二)	
(三十三)	
(三十四)	
(三十五)	
(三十六)	
(三十七)	
(三十八)	
(三十九)	
(四十)	
(四十一)	
(四十二)	
(四十三)	
(四十四)	
(四十五)	
(四十六)	
(四十七)	
(四十八)	
(四十九)	
(五十)	
(五十一)	
(五十二)	
(五十三)	
(五十四)	
(五十五)	
(五十六)	
(五十七)	
(五十八)	
(五十九)	
(六十)	
(六十一)	
(六十二)	
(六十三)	
(六十四)	
(六十五)	
(六十六)	
(六十七)	
(六十八)	
(六十九)	
(七十)	
(七十一)	
(七十二)	
(七十三)	
(七十四)	
(七十五)	
(七十六)	
(七十七)	
(七十八)	
(七十九)	
(八十)	
(八十一)	
(八十二)	
(八十三)	
(八十四)	
(八十五)	
(八十六)	
(八十七)	
(八十八)	
(八十九)	
(九十)	
(九十一)	
(九十二)	
(九十三)	
(九十四)	
(九十五)	
(九十六)	
(九十七)	
(九十八)	
(九十九)	
(一百)	

$$\left(\begin{array}{c} \frac{1}{2} \frac{d^2 \rho}{dt^2} \\ \frac{1}{2} \frac{d^2 \sigma}{dt^2} \\ \frac{1}{2} \frac{d^2 \tau}{dt^2} \end{array} \right)$$

(四)

(五)

みたかつた